

けれども、寄り添い合って過ごすことで、互いの魂
がいつしか響き合い分り合っていていくのだろう。こ
のことは、子どもと老人との間に限ったことではな
く、人と人とが交流することの原点にあることによ
うに思う。

類似したテーマの本としては、『さあ歩こうよお
じいちゃん』（トミー・デ・パオラ作・絵、絵本の
家刊）などがある。お近くの図書館の児童書のコー
ナーをのぞいてみられたらいかがだろうか。

（十文字学園女子短期大学）

「障害者を障害者と思わない」こと

松原 洋子

中学一年生の少年が、夏休みに友達同士で旅行を
したいと言いだした。東京から青森までの長旅であ

る。それを聞いた母親は心配する様子もなく、子ど
もたちの出発を見届けると、これ幸いとばかり夫と

香港旅行に出かけてしまった――。

話題のベストセラー『五体不満足』（乙武洋匡著、講談社、一九九七年）の一場面である。この少年、すなわち乙武さんには先天性四肢切断という重い障害がある。「息子が旅行に出ているスキを狙って、自分たちも旅行へ行ってしまうという、お気楽さ。はつきり言って、障害者を障害者とも思っていない」と息子はあきれってしまう。また、こんなシーンもある。偶然街で知り合ったヤクザ風のオジサンに親切にされたと報告する息子に、母親は「それはあたりまえよ」と平然と言っている。「だって、ああいいう方たちは、ツメるといっても小指一本程度でしよう。あなたなんか、全身ツメちゃってるんだもの。それは、敬意を表されるわよ」。

『五体不満足』の読者ならば、これを乙武親子の絆の強さやおおらかさを物語るエピソードとして好意的に解釈するだろう。だが、普通、母親のこうした

言動は「無責任だ」「無神経だ」と非難されるのではないだろうか。障害児は特別な保護と配慮を必要とする弱者であるから、危険にさらしてはいけない、傷つけてはならない。多くの人々はそれが正しいと信じている。

しかし、乙武さんの両親の考え方は違っていた。彼らは乙武さんが生まれたとき、「強い子に育てる。障害を盾に逃げるような子だけにはしない」という教育方針を定めたという。障害にともなう生活上の不便については、状況に応じて適切な工夫と配慮をする。しかし、障害にそれ以上の特別な意味を与えない。そんな両親のもとで彼らの期待にこたえて成長した乙武さんは、二十歳を過ぎるまで自分の障害を自覚したことがなかったという。障害者を障害者とも思わない両親の態度が、「かえってよかった」と彼は断言する。

障害児として特別視しないことが、なぜよかった

のか。障害学の研究者ギャラファアは、障害に対する態度を考える手がりとして三つの言葉を挙げている（『ナチスドイツと障害者「安楽死」計画』ヒュー・G・ギャラファア著、長瀬修訳、現代書館、一九九六年）。

一つは「展開」。個人の特徴を障害によって語る態度である。例えば、努力家の障害者がいれば「障害をバネにしてがんばっている」、怠惰な障害者を見れば「障害のせいで無気力になっている」と何でも障害に結びつけて人格を解釈する。これが「展開」である。もう一つは、障害ゆえに人間としての価値を低く見る「切り下げ」。障害をもつ本人の実感は棚上げにして、障害者というだけで「かわいそうな人」「不幸な人」と決めつける。障害者の存在がまるごと否定的な価値評価と結びつけられるのである。「切り下げ」を徹底していくと、かつてドイツに存在した「生きるに値しない生命」「人間以下」

という障害者の定義、そして障害者の「安楽死」処分に行きつく。

「展開」と「切り下げ」は健常者本位の障害者観であり、障害に対する見方の一つにすぎない。しかし、健常者中心の社会ではこれがあたかも普遍的な真理のごとく通用するため、健常者は障害者に対する優越感を、障害者は健常者に対する劣等感を学習することになる。健常者が障害者に「気の毒な弱者」というラベルを貼るとき、健常者は自動的に「保護者」として優位に立つ。その行為は善意と正義感に満ちているだけに、それが障害者に対して暴力となりうることに健常者は気づかない。

また、小さな頃から医師と濃厚に接触する障害児は、マイナスの自己イメージが強化される恐れがあるとギャラファアは指摘する。「医者から自分自身の定義を障害によってなされ、しかもその障害はいまわしいと伝えられる。だから、自分自身がいまわ

なる」と考えている。障害者の能力を制限しているのは環境であり、バリアフリーが理想的に進めば障害は限りなく縮小し、能力的に健常者と変わらなくなるという発想である。しかし障害者のなかには、バリアフリーは障害者を排除してきた能力主義の現代的な姿であり、「できないこと」を拒絶する思想ではないかと警戒する人たちもいる。また、障害者の能力を制約する要因を社会的障壁の存在に求めず、ざると、健常者とは違う身体が存在を無視し、障害者独自の身体を経験を否定することにつながると指摘する声もある。こうしてみるとバリアフリーという考え方は、健常者社会の価値観に近いところにあることがわかる。『障害学への招待』（石川准・長瀬修編著、明石書店、一九九九年）は、このような障害をめぐる議論の奥行きを深さを教えてくれる。本書は、障害者独自の価値・文化を探る新しい学問・思想・知の運動である「障害学」を、様々な角度か

ら紹介している。障害学は、健常者文化の対抗文化にとどまらない新しい価値の創造を期待させる。ところで、『五体不満足』には健常者の友達の話は出てこない。この本に登場する日本の障害者イメージは、意外なほど平板である。健常者の間で育った彼は、多くの健常者と同様に、日本の障害者に出会う機会が乏しかったのかもしれない。しかし、今、乙武さんは『五体不満足』で行動する障害者としてデビューした。「このころのバリアフリー」を掲げる彼は、あえて挑発的なタイトルをつけたという。その意気やよし、である。彼の聡明さと豊かな感受性が、「障害」との新しい出会いを实らせることを期待したい。

（お茶の水女子大学）